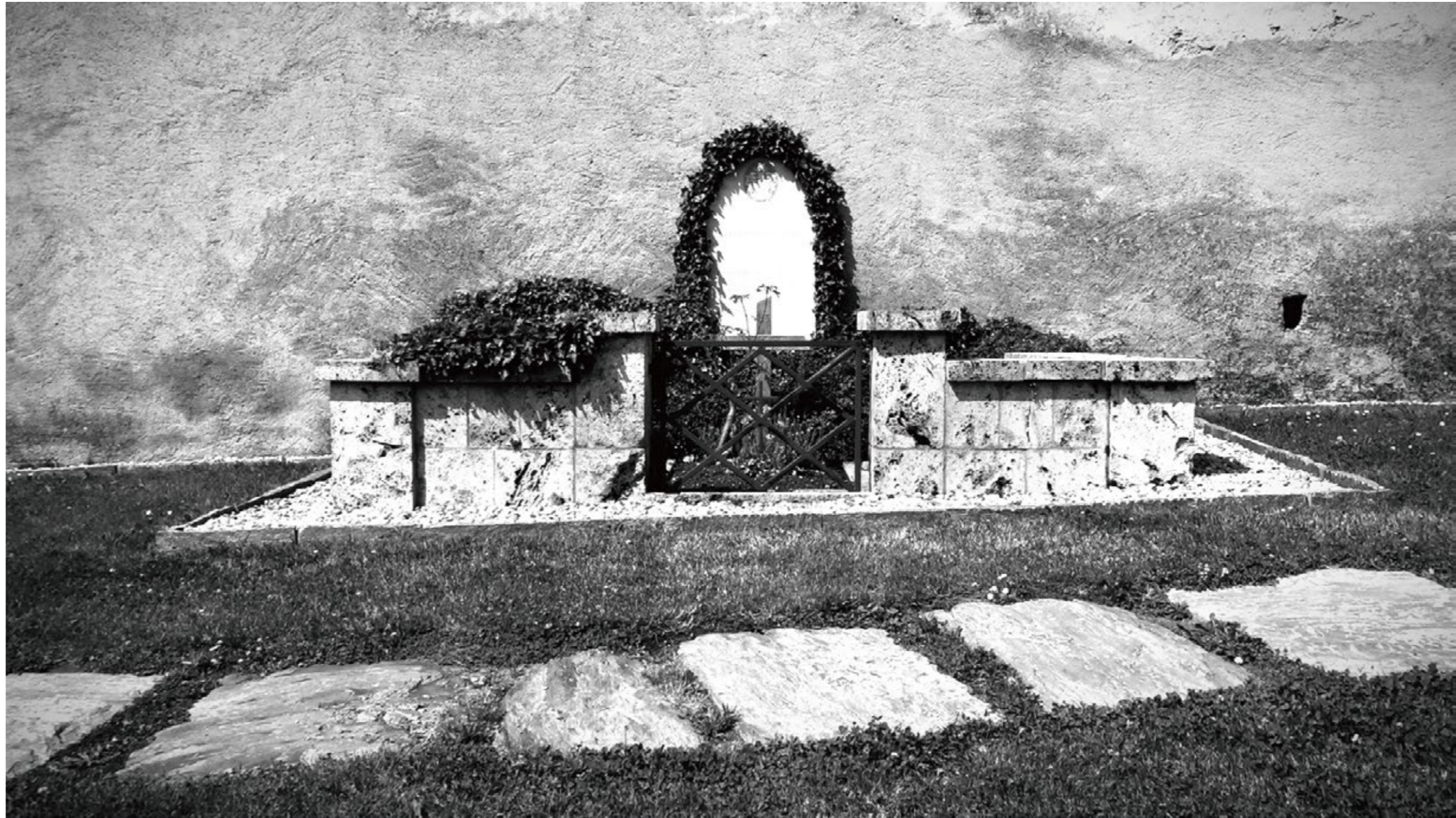


追憶が多くなれば、次にはそれを忘却することができねばならぬだろう。そして、再び思い出が帰のを待つ大きな忍耐があるのだ。思い出だけならなんの足しにもなりはせぬ。追憶が僕らの血となり、目となり、表情となり、名まえのわからぬものになり、もはや僕ら自身と区別することができなくなって、初めてふとした偶然に、一編の詩の最初の言葉は、それら思い出の真ん中に思い出の陰からぽっかりと生まれてくるのだ。

リルケ『マルテの手記』

(大山定一訳)より



写真上：スイスの南西部に位置するラロン村にあるリルケの眠る墓

移動すること、 主題よりも周縁、そして声

個展「Linguistic Montage」

MAXXX - Project Space, スイス・シエール, 2015年

もう1つ関連する僕の過去作品として、スイスのシエールにあるギャラリー MAXXX - Project Space で2015年に発表した展覧会「Linguistic Montage」(写真16,17)がある。この展覧会は、2015年に同地にあるアーティスト・イン・レジデンス Villa Ruffieux で約2ヶ月滞在制作を行なった成果であり、シエールで晩年を過ごしたオーストリアの詩人ライナー・マリア・リルケ(1875-1926)『マルテの手記』¹⁸からインスピレーションを得て制作された作品である。

リルケの『マルテの手記』では、パリの生活、幼年時代の思い出や読書

体験、歴史上の人物の様々なエピソードの断片的スケッチなどが、一人称の語り手によって、雑多なモンタージュのように語られている。

この展覧会では、映像作品《夜がくりかえす》¹⁹(写真20,21)および映像作品《およいでいる》²⁰(写真18,19)を中心にして構成されるインスタレーション作品を発表した。それらの映像作品は、時間イメージと言葉の連関が生み出す効果に着目しつつ、イギリス、東京、上海、スイス、フランス、韓国など、僕のそれまでの旅の道程での体験をiPhoneやコンデジで記録した映像とスイスでの生活を記録した映像を素材にして、『マルテの手記』のように一人称の語り手を加え、雑多なモンタージュによって編まれたものである。

この展覧会において僕が試みたことは、個展「さかいはさま、るしんこうけい」の延長線上にあった。そこでは、作品制作を通じた、亡くなった僕の祖父との出会いが主題であったが、「Linguistic Montage」では詩人リルケとの出会いが主題であった。この展覧会に出品した2つの映像作品は、両者ともに最初はリルケが実際に訪れた場所や暮らした家、あるいはリルケが眠る墓、そしてリルケの詩に綴られた風景などを

追いかけることから始まった。そこから旅のプロセスでの些細な出来事や出会いを映像で記録していき、最終的には滞在中にスイスのシエール近辺で撮影した映像だけではなく、リルケに至るそれまでの旅のプロセスで記録された断片的な映像群もモンタージュさせながら両者の作品を完成させた。これらの映像作品でも、リルケの人生をトレースするのではなく、そこから図らずもズレて行きつつ、僕自身の体験の記録となっている点が非常に重要である。

撮影された映像には、『マルテの手記』の手法を踏襲するかたちで、一人称で詩的に綴られたテキストが、作者自身の語りによるヴォイス・オーバー²¹として付け加えられている。例えば、大阪の淀屋橋の街並みからシエールの街並みへと繋がられるような一見無関係な映像の断片の連なりに1つのまなざしを投影させようとしたのである。

振り返ってみると、カメラを抱えて移動し続けることによって、その都度出会うものに半当事者性を持ちつつも、しかし図らずも主題そのものよりもその周縁に着目してしまうという映像メディアの特性にもあえて引きずられていくことは、映像の活用方法の可能性を広げるため

に、とても重要であるように思われる。この繰り返しのよって生み出される創造性やヴォイス・オーバーを活用した手法は、後に制作する『#まなざしのかたち』の着眼点である。

.....

¹⁷ 澤崎賢一(2015)「Linguistic Montage」MAXXX - Project Space, スイス

¹⁸ ライナー・マリア・リルケ(1973)『マルテの手記』望月市恵訳, 岩波書店

¹⁹ 澤崎賢一(2015)《夜がくりかえす》フルHD(8分30秒)

²⁰ 澤崎賢一(2015)《およいでいる》フルHD(9分4秒)

²¹ ヴォイス・オーバーとは、映像と同期していないナレーターなどの声のことを指す。